

マタイ福音書24章は、この世に終末が訪れる時、どのようなことが起こるかを示しています。23章によると、エルサレム神殿でイエスは、律法学者やファリサイ派の宗教指導者たちの偽善を糾弾し、彼らに対する神の裁きを預言しました。そして、イエスがエルサレム神殿の境内を出て行かれると、弟子たちが近寄って来てエルサレム神殿の豪華さを指摘したのです。ところが、イエスは2節にあるように、『これらすべての物を見ないのか。はっきり言うておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』と言うのです。

弟子たちは、23章でイエスが宗教指導者たちの偽善を厳しく糾弾した言葉を何度も聞いていたにもかかわらず、エルサレム神殿の建物の豪華絢爛たる姿に感動していたのです。当時のエルサレム神殿はヘロデ王が建てたもので、金や大理石がたくさん用いられていて、きれいな彫刻も施されていました。イエスが生きておられた時期である紀元20年代後半から建築が始まっていて、紀元64年によく完成したのですが、6年後の紀元70年にはローマ軍によって破壊されてしまったのです。マタイ福音書が書かれた時期には、こうしたエルサレム神殿の破壊の出来事がユダヤ人たちの間で周知の事実だったので、マタイ福音書は、この歴史的事実を踏まえつつ、生前のイエスがエルサレム神殿の崩壊を預言していたという描き方をしているのです。けれども、マタイ福音書はイエスが生前にエルサレム神殿の崩壊を預言していたということを強調するために、ここでイエスの預言が的中したことをここで強調しているのではないのです。そうではなく、世の終わりが来るときに戦争の騒ぎや戦争の噂を聞くけれども、慌てないように気をつけなさい、と忠告するのです。確かに、民族が民族に対して敵対して戦争が起こり、国が国に敵対することで戦争が起こって、いろいろな場所で飢饉や地震が起こって人々が苦しむだろうが、それは産みの苦しみのようなものであるということです。

現代は2回の世界大戦を私たちは経験しているため、戦争が起こるきっかけが政治的指導者の和平を目指す努力が足りなかったことで、起こるといふことを私たちはジャーナリズムなどを通して知っていますが、イエスの時代に民族同士の争いや国同士の戦争がどうして起こるかを一般の民衆は知る由もなかったのです。ですから、いったん、そのような世の中全体を巻き込むような戦争が起こると、世界の終わりが来たのではないかと受け止めてしまうこと起こったのです。イエスもそのように理解していたようです。地震が戦争によって引き起こされることはないことを、現代の私たちは一般知識として知っていますが、戦争によって飢饉が起こることは誰もが知っています。

ただ、イエスが世の終わりのことを「産みの苦しみ」と呼んでいることに注目したいと思います。当時の一般人にとって戦争や地震、飢饉は世の終わりを暗示するような恐怖を覚えたことでしょう。けれども、イエスはそれらの危機的状況を人間の産みの苦しみにたとえます。それは出産前に母親が陣痛の痛みを経験しますが、その陣痛の間隔が出産が近づくにつれて短くなり、出産の時には非常に大きな苦痛を伴います。けれども、そうした苦しみは赤ちゃんが生まれた喜びによって過ぎ去ってしまうのです。つまり、産みの苦しみは希望のある苦しみなのです。これと同じように、世の終わりにおける苦しみも、それと同じだということです。世の終わりに希望があるのです。それまでのこの世の矛盾がすべて露わにされることで、産みの苦しみが新しい希望にとって代わられ、古い時代の悪しきものが過ぎ去っていき、新しい時代が始まるのです。

ところが、この世の中では、イエス・キリストの神殿崩壊の預言とは全く別物の偽預言者が時々現れます。統一協会の文鮮明などが典型ですが、世の中の混乱に乗じて、自分が世の混乱を収めるメシアであると自称することで、人々を惑わすわけです。4節〜5節を読むと、『人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、「わたしがメシアだ」

と云って、多くの人を惑わすだろう』と云っている通りのことがこれまで何度も起こっているのです。

けれども、イエスが言われるように、世の終わりに希望がなければなりません。混乱の中でも希望を見出すように、目を覚まして目の前の混乱を冷静に見通して、人々が生きる希望を抱くことができるような方向性を目指す力が求められているのです。

本日のマタイ福音書24章36節以下では、世の終わりに人の子が来て、希望が明らかになるときが来る時のことは誰にも分らない。父なる神だけがその時を知っている。人の子と言われるメシアが来るのは、ノアの時と同じだということです。つまり突然に洪水が訪れるように世の終わりの時が来るが、それまで人々は日常の生活を普通に送っているのである。ノアとその家族は、神から箱舟を造るように命じられていたので、洪水に対応することができました。ノアの洪水の場合、世界が洪水に呑み込まれてしまったのですから、ノアのように危機的状況が訪れる前に備えておかなければならなかったのです。泥棒に対する備えも、夜の何時ごろに来るかがわかっていたならば、それまで目を覚まして待っていれば、対処することができるというのです。

つまり、目を覚まして、突然に襲ってくる終わりの時を待ち構えているならば、希望を見失うことなく混乱の時にも対応することができるといえるのです。もちろん、このように終末の時が強調されているのは、当時のキリスト教会がイエスの再臨の希望を根強く抱いていたからです。それは、ローマ帝国によってエルサレム神殿が破壊され、それに抵抗するユダヤ人の抵抗運動が高まったのですが、それもマサダでの攻防で完膚なきまでに敗北し手、ユダヤ教の一派とみなされていたキリスト教徒も迫害に遭って、この世の終わりに直面しているかのような状況だったのです。それでも、希望を失うことなく、神の新たな支配が貫徹する神の国が到来するということ希望を抱き続けたのです。マサダには老朽化したケープルで登りましたが、ここでユダヤ人は2年間ローマ軍と膠着状態で戦ったのですが、食料も底を尽き、もはや敗北が決定的になったところで、自決の道を選ぶのです。けれども、子どもと女性7人を脱出させて、ローマ軍との戦いの歴史的事実を後世に伝えるようにしたのです。この歴史的証人を残したことで、マサダでの戦いの様子が後世まで語り伝えられるようになって、その後の2000年近くの流浪の旅の中でもユダヤ人たちが希望を失わずに、地球上で生きながらえることになったのです。

これと似たことはその後の歴史でも繰り返されています。例えば、大航海時代のイギリスは世界各地に植民地を造りました。清国で紅茶がたくさん生産されていたのですが、イギリスが銀や金での支払いができなくなったために、インドで栽培されていたアヘンをその代金の支払いに裏取引で持ち込んだことで、当時の清国にアヘン中毒患者がたくさん生まれたのですが、それは当時のイギリスの一般庶民は全く知る由もなかったのです。イギリスの労働者階級にまで、紅茶を飲む習慣が根付いたことよって起こった悲劇ですが、イギリスの一般庶民は紅茶に入れる砂糖がどのように調達されているかも知らなかつたことでしょう。ポルトガルは、大西洋上のマデイラ諸島やアゾレス諸島でサトウキビを栽培しはじめ、労働力として西アフリカから黒人奴隷を連れて来るようになりました。1500年には南米のブラジルを獲得し、ここでも黒人奴隷を使った大規模な砂糖プランテーションを始めます。もっと砂糖がほしいという人間の欲望が同じ人間を商品として売買する非人道的な奴隷貿易を生み出したのです。サトウキビの生産から製糖までの作業工程は過酷な労働でした。無償で働く奴隷たちによって作られた砂糖は、イギリスの紅茶文化を補強して言ったのです。けれども、一般庶民が自分たちの紅茶を飲む習慣が黒人奴隷貿易を創り出していたことを知る由もなかつたと思います。このような事例は現代でも大なり小なり起きていくわけですね、見方を変えれば、そういう搾取される側の人間から見れば、世の終わりに等しい状況なのです。ですから、その時代が抱えている闇を目を覚まして見る冷静な姿勢が常に求められていることをイエスは教えていると言えるのです。